續花會集
卷二十七

鏡花全集　卷十七　第十七回配本（全二十九卷）

定價二千二百圓

昭和十七年一月二十四日　第一刷發行
昭和五十年三月　三　日　第二刷發行

著　者　泉　鏡　太　郎

發行者　岩　波　雄　二　郎

發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩　波　書　店

印刷　三陽社　製本　松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉 名月 1975

目次

萩薄内證話（大正五年十月）……一
通ひ路（大正五年十一月）……六九
木曾の紅蝶（大正五年十二月）……八五
町雙六（大正六年一月）……一三七
時雨の姿（大正六年一月）……一五一
伊達羽子板（大正六年一月）……一七五
炎さばき（大正六年一月）……一九五
幻の繪馬（大正六年一月）……二八七

峰茶屋心中（大正六年四月）……四一五
二人連れ（大正六年六月）……四七九
卯辰新地（大正六年七月）……四九五
繼三味線（大正七年一月）……五三三
黒髪（大正七年一月）……五九七
友染火鉢（大正七年二月）……六二七
茸の舞姫（大正七年四月）……六六一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

萩薄内證話

一

「舞は御覽なすつたつて、そりや構はない事よ。」

お妻は端然として云つた。

「土蜘蛛だつて、八島だつて可うござんす、けれど、見るやうにして御覽なさい。見たくでもない眞似をして、貴方をかしいぢやありませんか。」

「へい、」と故とらしくお辭儀をする、其の頭の掉工合が、べつかつこのやうに見える、波崎俊吉は最う酒がまはつて居た。

「御覽なさいな。」

お妻は傍に居る十三四の、餘所だと雛妓と云つた處の、稚兒髷に結つた振袖を、張のある瞳で見返りながら、

「へい……だつて。第一、返事が可厭だわね。諾とか、應とか云ふものよ。貴方も……大學の先生ぢやありませんか。」

「何う仕りまして、生徒がほんの卵の黄味をかへしました、青いのでございます。見るやうにして見ろと云ふ、御意の處は、成程至極御尤でござる。」

と痩せた肩を聳がして、正的にお妻の、艶にして些と寂しい、淡雪のやうな顔を見て、

「仰せまでもありません。が、見るやうにして見ようとするには、踊一番大枚の十五圓。殊に唯今の土蜘蛛なんぞ、細工ものには手が掛りますから、二割増か三割増。」

「可厭あな。」と光子と云ふ、其の稚兒髷が莞爾。

俊吉が最う一倍肱を張つて、

「肝心な事です、可厭ぢや濟まない。二兩二分處、お仕着の此の御料理で、懐中勘定をしながら、御酒を頂戴に及ばうと云ふ身分ぢや、踊を(見るやうに)しちや見られません、お歌所の御意ぢやあるがね。」

紹の縞小紋に、結雁金の三紋着、蘆に鷺草の裾模様、白と銀で露芝の玉の襟、色の中にも品の可い、お妻は水の垂りさうな圓髷で居るが、誰も蒔繪の硯箱で短冊を持つとは思はぬ。——なにがし公園の緑の中なる此の翠明樓の客待遇に二組ある……一方を舞君、踊子と云ふのに對して、三味線太鼓、下かたの鼓も笛もおしなべて、地方、唄方と云ふのである。——お妻は長唄で勤めて居た。……醉つた景氣の俊吉は、お歌所なぞ、と云つたものの、やがて此の美女の身を思へば、

うたかたの、かなの響きも、もの寂しい。
婦は俯目に聞いて居た。が、思の籠る目の色して、默つて俊吉の猪口を取る、と、目で知らせて振袖の稚兒髷に、一つ酌せて一口飲いて、
「波崎さん。」
「え。」……更まつて呼ばれたので、俊吉は吃驚したやうな聲を出す。
「誰も貴方に、」
あとを一息に又飲んで、
「何時、貴方に、お金子を使へと言ひました。」
「勿論ですとも。當御殿相當な事をして顏を出せと言はれたんぢや——何しろ大手門に自身番、請願巡査の派出所が有らうと云ふ式臺へは入られません。」
「今日はね、姉さん。」
稚兒髷の光子が、可愛く紅の光る唇を開き、
「門からね、眞直に玄關へ入つて來らしつたつて……お縫さんが、あの、然う云つて、嬉しがつて居ましたよ。」
お汁粉一膳欲いと云ふ、物甘えた聲で言つた——お縫は仲好、お妻とは同部屋の相仕の妹、內

では師匠株の踊子で――いま向の廣間で、土蜘蛛を舞ふが其である。

二

「今日も見て居たかい。」

俊吉は光子に言つた。

「えゝ。」と、ませた狀に打頷く。

「だつて、晩方、私が入つた時、お縫さん、玄關にや見えなかつたぜ。」

「あの、それはね、あの、貴方が植込の隅の方を廻つて入らつしやると、何だか、肩身が狹くつてでもおいでなさるやうで、姉さんの幅が利かない。第一、あの江戸兒黨が京の組に對しても。」

――と云ふ、樓には綺麗どころの京女が少くない。數は寧ろ東京より多いので、豫て紅の袴を爭ひ、紫の襟を戰はす。

お妻は飲みさした疊の猪口を、俯向いて見ながら、透通るやうな薄い膝を、無意識に指で彈いて、拍子舞の地を、指白くちら〳〵と移して居た、ふと、其の眦を稚兒髷に返して、

「何だねえ、高慢な。」

「えゝ、ですけれども、ほゝゝゝ、あの、お縫さんが（約束だから、自分でお玄關に見張つて居

れば、過日は眞直に入つておいでなすつたけれども、あの然うでない、又隅つ子を行らつしやりやしないか)つて、先刻は、あのお帳場の傍の小座敷へ隱れて、植込から覗いて居たんですつて——お電話が掛つて、あの、大抵入らつしやる時間が分つて居るんですから。」と、せい〳〵息を繼ぐ。

「人が惡いわ。ね、お縫の奴。」と眉を顰めたのが婀娜に見えて、微笑みながら猪口を獻した。

其の手で酌をうけながら、

「冥加至極、此奴を願はうばつかりが、大抵樂ぢやありませんな！」

「知らない。」と衣の音、幽に膝を摺らした肩が、屏風から半ば漏れて、疊廊下を間に隔てた、其の廣室の蜘蛛の曲に何となく打傾く。

表二階の此は茶の室で、座敷々々へ給仕の煎茶を、婦たちの汲む處——長廊下の通に一寸入つて、息拔をしようと云ふ內證の部屋だから、夏だと云ふのに、二枚折金地の繪屏風で圍つてある。直ぐ其の屏風の外には、銘を一の谷と言ひさうな、青葉若葉に横笛を蒔繪した刳拔きの丸火鉢に、茶釜の音。松風と聞けば涼しさうだけれども、無官大夫の客に取つては、あつ盛と身に響く。お剩に背後の戸棚の前に、其處等へ配る客蒲團が積んである。が、宵勘定にもまだ時刻が早い、……それ然り、而して後の故に、行燈部屋や夜具棚へ引下つた次第ではない、此は少くとも二階

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

へ上つては居るのである。

實は夕暮から、二組三組、顏も幅も利く臨時の客が立籠んだために、お妻が氣を揉んだけれども、此の顏も幅も利かない男を達引いて納める座敷が他に無かつた。——勿論、俊吉の方は晝の內に電話で打合せがしてあつた。自働と名づける四民平等な掘立小屋で、此へ掛ると餘り圖のよくない鳴子を引く形に成る奴。……で、チリチリンと番號を呼出すのが、惡くすると、御大客で呼べません。——取次の奧家老に橫外頰を抛かれる。が、今日なぞは出來がよく、お中蔣お妻の聲が直ぐ受けた。

「……近い？——遠いかい？——」

唯、婦の方は帳場傍の電話室から、硝子越に、壁へ貼つた客うけの日取を一度念のために覗いて、次手に京都で然るやむごとなき御殿へ御奉公申上げたと言ふ、色白で顏の光る、ギラリと眼鏡を掛けた橫肥りの老女、卽ち總取締の顏色を窺つた上で、餘り忙しくもなし、がらりと暇でもなし。可い加減に座敷と身體の繰廻しが着くと、

「はあ、近いの。」と、判然言ふ。

首尾が惡いと、

「遠……い……の……よ。」と、引張つて勢のない聲を出す。

「都合は着かない。」

「だつて、遠いんですもの。」と聲までが遠く成る。卽ちおジヤンだ。否、おジヤンも禁句。逢へる逢へないを此の暗號、時々裏の森、横手の坂で、逢曳の符牒にも用ゐるに至つては、時節がらも辨へず、近いだの遠いだの、戀路と火事を一所にした是非に及ばぬ徒である。——今日は其の首尾が(近い)のであつたのに、屏風の裡で蒲團を背負つては、成程、樂ではありますまい。

俊吉は、うまさうに呷と受けて、

「そりや、其方は御存じぢやあるまいけれど、なか〳〵何うして、御門内の自身番と向合ひに、自動車だ、二頭立だ、お抱車だ。植込を透かした大式臺には、三ツ指で八九人、上品事にづらりと控へた大手へ立つて、一つ見込んで御覽なさい。……あの又敷詰めた小砂利が惡く安下駄の齒に引掛るからね、歩行のぶらりで乘切るのにや、餘程の度胸が要ります。此奴をお縫さんが、ああだの恁うだの、や、帽子が仰向き過ぎた事の、杖の持やうが曲つた事の、肩を怒らしちや書生ツぽいなんて、一々お手のものの振つけで、式臺から絲を引張るんだから堪りません。何の事はない、此方は面くらつた爪と云ふんだ、然も奴爪だね、あゝ、ふら〳〵ふら〳〵。」

斜違ひにお妻を見て、

「お剩に先刻なんざ、掛違ひに、杉丸が、自動車で横づけとおいでなすつた。瞠若たらざるを得

ませんや。」

其の杉丸と云ふは、品川あたり御殿山の御前と稱へる、洋行がへりの男爵で、しば〳〵お妻に通はせ給ひ、惡口說きに口說かせ給ふ……

三

如何にも波崎はひるんだらう。それ〴〵の首尾、算段で、彼が借家の、麻布笄町から電車で來て、飯倉の辻をうろついて居る時分に、男が御殿山を乘出しても、疾き事稻妻の如き乘ものは、翠明樓の大手では、晃々と、摺違ひに成つて、光り輝いて先へ入る——

「其時義經少も騷がず、眞直ぐに乘切つたんだ。宇治川よりか難しいんです。あゝ、源太景季ぢやないけれど、梅ケ枝の手水鉢でも見着からないかな。」

と差出す猪口、今度は稚兒髷の手でうけて、波崎は吻と息した。

お妻は故と知らない振で横を見た。が、膝の手ばかり、遣瀨なさを紛らすやうに、三味線の調子も丁ど早間に刻む、と其處へ、一人、十七八の島田髷なのが急足に來て差覗いた。

「お妻さん。」

「あゝ。」と屏風から、襟脚白う、さしのべて、半ば其方へ顏を出す。脊筋を反らして、逆に裾に

ついた指が、其の鷺草より蘆に白い。
「一寸、新座敷で。」
「はあ、だつて、今しがた一座敷、舞臺の間で、地を濟まして來たばかりぢやありませんか。」
踊は別に最う一組あつたと見える。
「ですけれども。」と困つたやうに、敷居際で聲を密める。
「お濱さん、入り給へ。」と波崎が裡から呼んだ。
「はあ、波さんですか、後ほど——ねえ、お妻さん姉さん。」
「今、直ぐに行くことよ。」と、俯向いて向きかはる。
「ね、何うぞ——波さん。」
「何だ。」
「醉つちや可厭よ。」と、はら〳〵跫音、やがて階子段をトン〳〵下りる。
「……男爵だらう、御催促。」
と膳はづれに波崎の乘出す胸を、押戻すやうなお妻の聲。
「誰でも可うございます。——一寸行つて來ますから。貴方醉つてまた、梅ケ枝の手水鉢なんか唄つちや……可厭ですよ。」

「唄なんか……酒は飲むがね。」
手酌で引寄せる銚子を押へて、
「光ちゃん、熱いのを。——あとで唄つたら抓つて頂戴。」
お稚兒が笑つて、人形のやうに座を立つと、羅のお妻の裳が、疊をするりと屏風へ入つて、
「可くつて、波さん。」
「大丈夫、大丈夫梅ケ枝は遣りませんがね、うまく三味線が生捉れたら、東雲のストライキ。」
「以ての外です、相成りません。」
と今度は優しく莞爾して、横から撓やかに肩を寄せる、顔を並べた身動ぎに、袂が觸つて萩が
そよぐ、唯屏風の繪を見て、颯と瞼に色を染めた。
屏風の繪を紹介する……白玉か何ぞと人の問ひし時……背に、やはゝとおもみの掛つた、芥
川の月の露の御兩人である。
「一寸、」
「……」
「お江戸日本橋七つ立ちは？」
「不可いのよ、今夜は。」

と、繪の月に影を映して、空色地の結雁金が、衝と草の中を外に出た。が、敷居際で立留つて、
「あ、御覽なさい——丁どお縫さんが蜘蛛の絲を……」と、呼吸を忙いて低聲で呼ぶ。
波崎は急いで出て、お妻の袖を綠に掛けた、松の風情で並んで立ち、
「何だい、——見るやうにしなくつちや見ては不可い、と云ふ癖に。」
「此なら可いのよ——先刻、何です、向うの襖へ附着いて、投出した膝頭へ組手を突反らしたりなんか、風采が惡いつちやないんだから。」
「だつてお縫さんが、退屈だらうから見ろと云つた。」
「誰が、あんな風采をなさいつて申しました。」
「何うせ折助仲間さね、……御前のやうには參りませんよ。」
股をふつり。——「痛い。」
恁う青疊を舞臺に取つて、四邊を拂つた。燕子花の紫に、薄い虹のさしたやうな傾城姿のお縫の面影。唯見ると、蜘蛛の精の凄さは無しに、何うやら美しく微笑んだらしいのが、拍子を蹈んで、蹴返す裾、燃立つ裳は、火を散らし、捌く黑髮は煙を流し、ふと此の二人を狙つたらしい、横に走る瀧の如く、敷居越に絲を飛ばした。再び千筋を空へ投げたが、天井へ雲を浴びせ、むらむらと縺れ掛つて、花電燈の光を包んだ傾城の其影とともに、廊下も霞んだお妻の姿。紹の友染

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook